「立教科目」今後の展開

―立教生の学び方―

安松　幹展

2006年度より，全学共通カリキュラムの総合教育科目の新たな科目群として，「立教生の学び方」を，開設することになった。この科目群では，全学部全学年が履修対象となる全学共通カリキュラムの特徴を最大限利用して，大学生に必要な「スタディスキル」を獲得することを目的としている。ここでは，本科目群の開設に向けた検討グループにおいて，座長を務めさせていただいた立場から，この科目群の開設に向けた経緯と内容を報告する。

「立教生の学び方」科目群の開設は，2004年7月に全学共通カリキュラム特別委員会（小泉哲夫委員長/理学部教授）から出された「全学共通カリキュラム　総合A群の改革について（答申）」の中で提案されていた「学びの基礎」科目群が発端となっている。この答申においては，「この科目群については，少人数で，大学における学習の基礎的なスキルや考え方を学ぶことを目的としたものである。この科目群の位置づけは，各学部での専門導入教育の前段階にあたるものとしたい。例えばどのような分野での文章を書く際にも必要となる基礎的事項を学ぶ「日本語表現法」や，数学について文系・理系を問わず必要な最低限の知識を学ぶ「数学入門」などの科目を想定している」として，立教大学における導入教育の必要性が示された。

これを受けて，総合教育科目担当部会長（名和隆央/経済学部教授）より，「現代の学生の基礎学力の低下や，学ぶ意味や意欲の喪失などの問題に対応するため，少人数で，大学における学習の基礎的なスキルや考え方を学ぶことを目的として，『学びの基礎』を新たに設ける」（2006年度以降の総合教育科目カリキュラムの枠組に関する提案，2004年9月）ことが提案された。その後，各学部，各研究室，将来計画推進本部などからの報告や協議内容を受けて，上記の提案理由に加えて「本学ではこれまで，『学びの基礎』のような科目を開講してこなかったので，この分野における科目運営のノウハウの蓄積がないこと，さらに『大学教育開発・支援センター』の設立にもみられるように，同分野に関するカリキュ

ラム開発や情報発信が急務であることから，全学部全学年に開かれている総合教育科目において，小規模であっても開講される意義は少なくない」（2006年度以降の総合教育科目カリキュラムの枠組に関する再提案，2004年10月）として，「『学びの基礎』検討グループ」を発足し，実施に向けて詳細に検討することとなった。

検討グループのメンバーは，今回提案された「学びの基礎」科目群の科目例（論理的思考法，数学入門，コミュニケーション，大学で学ぶということ，ルポタージュ法，日本語文章表現法，ディベート）と専門領域とを考慮し，沖森卓也教授（日本文学科/文学部），池田伸子教授（日本語教育研究室主任/経済学部），山田裕二講師（自然科学研究室主任/理学部），長島忍教授（情報教育研究室主任/経済学部），安松（専門委員/社会学部）であった。また，オブザーバーとして名和隆央教授（総合教育科目担当部会長/経済学部），大野久教授（大学教育開発・支援センター副センター長/学校・社会教育講座）に，ご意見をいただいた。検討会は，2004年12月から2005年3月にわたって，以下の順序に沿って進められた。

1. 前提条件の確認
2. 総合構想小委員会における議論の経緯と本検討グループの役割の把握
3. 導入教育という概念の整理
4. 現在，全カリで展開している「学びの基礎」関連科目の整理
5. 「学びの基礎」展開案の作成

前提条件の確認においては，展開コマ数は24コマ程度であることや1コマの履修人数は50名程度の少人数にすること，そして全学共通カリキュラムの中で展開すること（全学年全学部を対象とした科目群であること）を，「第25回将来計画推進本部議事録」から確認した。

総合構想小委員会における議論の経緯と本検討グループの役割の把握においては，上述した経緯を，「2006年度以降の総合教育カリキュラムの枠組みに関する提案」（2004年11月15日全カリ運営委員会資料の中から「学びの基礎」に関するもの）から行った。

導入教育という概念の整理では，オブザーバーとして参加していただいた大野教授より，「立教大学における導入教育の意味とその再検討（立教大学教育開発・支援センター）」をもとに，導入教育の概念をレクチャーしていただいた。そこでは，以下のような分類が示された。

① スタディスキルの教育（一般的なレポート・論文の書き方・文献の探し方など）
② スチューデント・スキルの教育（大学生に求められる一般常識や態度）

③　専門教育への橋渡しになるような基礎的知識・技能の教育
④　動機付け，社会性（自分探し，アイデンティティ形成）
⑤　補習教育（本来高等学校までに習得すべき内容）

さらに，参考資料として，「日本における一年次教育の構造と同志社における事例（同志社大学　山田礼子）」や「『わが国の高等教育の将来像』は教養教育について何を語っているか（国立大学財務・経営センター　天野郁夫，大学教育学会2004年研究集会要旨集ｐ28-29）」を座長から説明した。

現在，全カリで展開している「学びの基礎」関連科目の整理では，「2005年度全カリ総合教育科目開講科目・コマ数一覧」から，現状の展開科目を確認後に，ようやく，「学びの基礎」展開案の作成に進むことができた。

作成にあたって，まず行った事は，立教大学としての教育における全カリと学部との役割分担を明確にすることであった。上述の導入教育の概念整理から，立教大学の現状を整理すると，以下のようにまとめることができた。

①　学部（素材が専門），全カリ（素材が総合）で展開する
②　正課外活動やガイダンスなどで展開している
③　学部で展開している
④　全カリで展開（「大学」科目や総合Ｂ）している
⑤　必要性は感じるが，必修にしないと効果は出ないため，全カリでの展開は困難

特に，⑤に関連する科目に関しては，議論の経緯を詳細に説明する必要がある。必要性に関しては，新学習指導要領適用学生の入学，受験科目以外の学習をしない傾向，受験難易度の変化などから，検討グループの全員が強く感じていた。しかし，「食塩水濃度の計算が２割の学生はわからない。しかし，これを解決するためには，必修もしくは検定制（数学検定，日本語コミュニケーション検定，パソコン検定など）にする必要がある」という意見に代表されるように，全カリの選択科目では，学習する必要のない学生が履修し，苦手な学生は履修しないことが予想される。したがって，全学部全学年を対象とした選択必修科目に分類される全カリでの展開は，現時点の枠組では困難であると結論付けられた。しかし，立教大学における導入教育の問題を放置することはできないと考え，学生の学力レベルに対するコンセンサスを得るために，全学もしくは新入生を対象としたデータの必要性が提起された。

以上の検討結果から，検討グループでは，上記①と④を展開する案として，「学びの基礎」科目群から名称を「大学生の学び方」に変更して12コマ，残りの12コマを「大学」テーマ科目とし

て6コマ，情報実習科目として「情報科学入門」を4コマ，「論理的思考法」を総合A定常科目として2コマを，総合教育科目のそれぞれの科目群に再配置することを提案し，その後の全カリ運営センターでの議論を経て，2006年度からの開設が決定された。

その後，立教大学の建学の精神を具現化した科目群として「立教科目」を2005年度の「特色ある大学教育支援プログラム(特色ＧＰ)」に申請することになり，「立教科目」群に対して，「大学生の学び方」科目群とが，有機的に発展していく可能性を視野に入れ，「立教生の学び方」に名称が変更された。

2006年度の実施後の自己点検・自己評価をしっかり行い，より効果的な展開方法をさらに検討していきたいと考えている。

＜資料＞

［共通シラバス］

○科目内容

自らの興味・関心を見つけ，それを探求し，専門領域にとらわれない広い視野をもって議論する能力を養う。

○履修要項の説明文

「立教生の学び方」は，2006年度から新たに開講される科目群で，学生同士や教員と積極的に議論できるように少人数で授業が行われます。具体的には，「大学生」としての学習に必要な「調べる」「読む」「考える」「書く」「発表する」能力を養うことをねらいとします。与えられた知識や情報を鵜呑みにせず，価値を自ら判断し学んでいくために，自らの興味・関心を見つけ，それを自らの意志で探求し掘り下げていく手法を学びます。

また，全カリでは，全学部全学年の学生を履修対象としているため，学問的背景や年齢の異なる履修者が，テーマについて「議論する」ことが可能となります。この特徴を生かして，学部学年，また自分の専門領域にとらわれない広い視野を持ち，立場の異なる相手の意見を尊重しながら自分の意見をしっかりと主張できる能力を高めることもねらいとしています。

「立教生の学び方」は全て専任教員が担当するので，立教大学ならではの多彩なテーマが用意されています。展開される科目群の中から，自分の興味に沿った科目を選択し，「立教大学で，このテーマについて深く掘り下げました」と言えるような，積極的な気持ちで履修してください。

○授業の目標：本科目群は，「大学生の学び方」として，必要であると思われる「調べる」「読む」「考える」「書く」「発表する」能力を養うことを一つ目のねらいとする。「高校生の学び方」と「大学生の学び方」の違いは何だろうか？高校生までは，教師から知識を与えられ，それを吸収することが第一の目的であった。しかし，大学生からは，与えられた知識や情報を鵜呑

みにせず，価値を自ら判断し学んでいくことが重要になる。そのためには，自らの興味・関心を見つけ，それを自らの意志で探求し掘り下げていく手法を学ぶ必要がある。

さらに，卒業後の社会においては，プレゼンテーション能力や議論する能力が求められている。全学共通カリキュラムでは，全学部全学年の学生を履修対象としている。したがって，学問的背景や年齢の異なる履修者が，特定のテーマについて「議論する」ことが可能である。本科目群では，学部学年の垣根を越え，自分の専門領域にとらわれない広い視野を持ち，立場の異なる相手の意見を尊重し，自分の意見を主張できる能力を高めることを二つ目のねらいとする。

○授業の内容：個人またはグループ毎に，担当する教員が設定したテーマの中から個別テーマを見つけ，文献・情報を検索し，内容を精読し，レジュメにまとめ，発表する。その過程の中で，個別テーマの選択理由，文献の選択理由，レジュメへの記述理由，発表内容などに対してディスカッションを行う。

○授業評価方法・基準：各担当者別シラバス参照のこと。

○その他（HP等）：特になし。

○キーワード：立教生，大学生，探求，議論，

［担当者別シラバスの例］

○科目名：立教生の学び方

○サブタイトル：現代スポーツを考える

○担当者：安松幹展

○学期/単位数：後期/2単位

○ねらい：現代社会におけるスポーツの諸問題は，経済，政治，国際情勢，経営などとの微妙な関係の中で変化しています。また，スポーツ科学の分野では，化学，物理学，生理学，心理学からの貢献も非常に大きくなってしています。本講義では，こうした現代スポーツが直面している諸問題から，履修者各自が個別テーマを見つけ，探求していくことを目的とします。

○授業方法・内容・評価方法：前半は，情報検索方法を学んだ後，各自で興味のある個別テーマを決定する。さらに，学年を縦割りにした小グループを形成し，決定した個別テーマに関して，探求成果の発表に向けてグループ内外で議論を進めていきます。成績評価は，出席状況とグループ毎の発表および議論，そして提出レポートから総合的に行います。

［2006年度担当者とサブタイトル（シラバス掲載順）］

千石英世（文学部文学科文芸・思想専修教授）：読書会の愉しみ

須永徳武（経済学部経済学科助教授）：会社と仕事について考える

田中秀和（理学部物理学科教授）：科学とは何か

松田宏一郎（法学部政治学科教授）

：現代社会の問題と学問的視点
久保田浩（文学部キリスト教学科助教授）：現代社会における宗教
桜井厚（社会学部社会学科教授）：現代の家族問題を考える
尾崎俊哉（経営学部経営学科教授）：グローバリゼーションについて考える
小峯和明（文学部文学科日本文学専修教授）：沖縄を考える
空閑厚樹（コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科助教授）：「生命倫理」について考える
松本和幸（観光学部観光学科教授）：「人の移動と人口」について考える
北村洋（現代心理学部映像身体学科教授）：認知心理学から人の知性について考える
安松幹展（社会学部メディア社会学科助教授）：現代スポーツを考える

やすまつ　みきのぶ
（本学社会学部助教授・全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目担当専門委員）